

哀れな男たち

一人二役で演じられるダーリング氏とフック船長

沢 辺 裕 子

1904年12月27日、ロンドンのデューク・オブ・ヨーク劇場において『ピーター・パン～大人になりたくない少年』(*Peter Pan; or, The Boy Who Wouldn't Grow Up*)は初演された¹⁾。その初演時にジェラルド・デュ・モーリエ (Gerald du Maurier)²⁾が現実世界のダーリング家の父親ジョージ・ダーリングとネバーランドの海賊船船長ジャス・フックを演じて以来、伝統的にこの二役は一人の役者が演じてきた。

このことは、舞台演劇だけではなく、ミュージカル作品や映画にもあてはまる。レナード・バーンスタイン (Leonard Bernstein) が歌詞と曲を担当した1950年のミュージカルではボリス・カーロフ (Boris Karloff) が、メアリー・マーティン (Mary Martin) が主役を演じた1954年から1955年のブロードウェイ・ミュージカルではシрил・リチャード (Cyril Ritchard) が、サンディ・ダンカン (Sandy Duncan) 主演の1979年から1981年のリバイバルではジョージ・ローズ (George Rose) が、元オリンピック体操選手キャシー・リグビー (Cathy Rigby) がアクロバティックなピーターを演じて人気を博した1990年から1999年のリバイバルでは、スティーヴン・ハナン (Stephen Hanan)、J・K・シモンズ (J. K. Simmons)、ポール・シェフラー (Paul Schoeffler) がそれぞれ、この二役をこなしている。

また、1985年以來、英国のみならずヨーロッパ各国でも上演されているピエール・チェイター＝ロビンソン (Piers Chater-Robinson) の『ピーター・パン～ブリティッシュ・ミュージカル』 (*Peter Pan: The British Musical*, 1985) にも、1994年から1995年に上演されたグリーン・ジョーンズ (Glyn Jones) の『ピーター・パン～ミュージカル・ファンタジー』 (*Peter Pan: A Musical Fantasy*, 1994) にも、「ダーリング氏とフック船長は一人二役で」という配役指示がある。ジョン・ケアード (John Caird) とトレヴァー・ナン (Trevor Nunn) がもともとはロイヤル・シェイクスピア劇団のために書いた脚本 (1982-84) に手を加えた『ピーター・パン～五幕のファンタジー』 (*Peter Pan or the Boy Who Would Not Grow Up: A Fantasy in Five Acts*, 1993) では、1997年12月に英国国立劇場でイアン・マッケラン (Ian McKellen) がこの二役を演じて話題を呼んだ。

映像化されたものとしては、ウォルト・ディズニーのアニメーション映画『ピーター・パン』 (1953) でさえ、ダーリング氏とフック船長は声優ハンス・コンリード (Hans Conried) が二役を務め、P・J・ホーガン (P. J. Hogan) 監督の映画『ピーター・パン』 (2003) でも、ジェイソン・アイザックス (Jason Isaacs) がこの二役を見事に演じ分けている。

ダーリング氏とフック船長の一人二役の伝統は、当初は限られた数の役者に複数の役割を当てるという劇場経営的な理由から始まったのかもしれないが、J・M・バリ (James Matthew Barrie, 1860-1937) がこの作品の舞台での成功を受けて、1911年に小説の形で出版した『ピーターとウェンディ』 (*Peter And Wendy*, 1911) や1928年に戯曲として出版した『ピーター・パン～大人になりたくない少年』 (*Peter Pan or The Boy Who Would Not Grow Up*, 1928) を読んでゆくと、それだけでは説明がつかない結びつきがこの二人の登場人物の間には存在していると気づく。ここでは、小説『ピーターとウェンディ』や戯曲『ピーター・

パン』の中に描かれた、一見対照的なダーリング氏とフック船長の奇妙なまでの表裏一体性を取り上げる。

* * *

ジョージ・ダーリング氏 (Mr George Darling) はロンドンの金融街シティで働くビジネスマンであり、ロマンティックな妻メアリ・ダーリング夫人 (Mrs Mary Darling) とは対極の現実的な男性として描かれる。夫妻が金曜日の夜のパーティに出掛けている間に、ダーリング家の子どもたち三人ウェンディ (Wendy)、ジョン (John)、マイケル (Michael) がピーター・パンにさらわれネバーランドへと飛び立ってしまい、後悔の念に苛まれる妻に対し、ダーリング氏はラテン語を使って非は自分にあると言う。

‘I ought to have been specially careful on a Friday,’ she used to say afterwards to her husband, while perhaps Nana was on the other side of her, holding her hand.

‘No, no,’ Mr Darling always said, ‘I am responsible for it all. I, George Darling, did it. *Mea Culpa, mea culpa.*’ He had had a classical education.³⁾

‘*Mea Culpa, mea culpa.*’ はラテン語で「わが過失なり、わが過失なり」という意味で、「彼は古典の教育を受けていた」という一文が添えられている。

ジャス・フック船長 (Captain Jas. Hook)⁴⁾ は、海賊ながらも言葉遣いや物腰が他の海賊たちとまったく違って紳士的であることが物語の中で何度も描かれる。

In manner, something of the grand seigneur still clung to him . . . the elegance of his diction, even when he was swearing, no less than the distinction of his demeanour, showed him one of a different caste from his crew. (Chapter 5, p. 115)

そして良家の子息が行く寄宿制パブリック・スクールをフックが卒業していることが物語の後半で明らかにされる。でしゃばりな語り手 (intrusive narrator) が「行間を読んできた読者はもうお気づきのことと思えますが」と前置きをしていることから、それが何度もほのめかされてきたことがわかる。

...as those who read between the lines must already have guessed, he had been at a famous public school; and its traditions still clung to him like garments, with which indeed they are largely concerned. (Chapter 14, p. 188)

パブリック・スクールの中でもそれがかのイートン校 (Eton College) であることは、物語『ピーターとウェンディ』の中では明確には述べられていない。しかし戯曲『ピーター・パン』では、フック船長の最後の言葉は「イートンに栄えあれ」——‘*Floreat Etona*’⁵⁾——という同校のラテン語のモットーであることを考え合わせれば、フック船長はイートン校出身者という設定なのは明らかだ⁶⁾。ダーリング氏と同様、フック船長にも古典の知識があることも、台詞の端々に描かれている。自分の気に障ることを‘that is where canker gnaws.’ (Act 5, Scene 1, l. 49) と表現する中には間違いなくシェイクスピアの響きがあるだろうし⁷⁾、海賊船上の子どもたちを死に追いやろうとする時には ‘I’ll show you now the road to dusty death.’ (Act 5, Scene 1, ll. 206-07) と、迫り来る死

の恐怖を語った『マクベス』からの有名な台詞を踏襲してさえいる⁸⁾。このようにダーリング氏とフック船長は古典に通じた教養ある人物として描かれている⁹⁾。

イートン校では服装が大きな関心事と上の語り手の言葉にもあるが、ダーリング氏も服装に関してうるさいことがパーティに出掛ける前の喜劇的な場面から推察できる。

He came rushing into the nursery with the crumpled little brute of a tie in his hand.

‘Why, what is the matter, father, dear?’

‘Matter!’ he yelled; he really yelled. ‘This tie, it will not tie... Not round my neck! Round the bedpost! Oh yes, twenty times have I made it up round the bedpost, but round my neck, no! Oh dear no! begs to be excused!... I warn you of this, mother, that unless this tie is round my neck we don’t go out to dinner tonight...’ (Chapter 2, p. 81)

ベッドの支柱になら結べるが、自分の首にはネクタイを結べないダーリング氏が、もしネクタイを結べなければパーティには行かないと痲癩を起こす場面だ。続いて次の場面では、乳母犬ナナ(Nana)¹⁰⁾とぶつかり、新調したズボンに犬の毛がついて気が動転するダーリング氏の様子も描かれる。

The romp had ended with the appearance of Nana, and most unluckily Mr Darling collided against her, covering his trousers with hairs. They were not only new trousers, but they were the first he had ever had with braid on them, and he had to bite his

lip to prevent the tears coming. (Chapter 2, p. 82)

それは新しいだけではなく、ダーリング氏にとって初めての組み紐飾りが側面についた立派なズボンで、ダーリング氏は涙ぐみさえする。

フック船長の黒く長い巻毛と赤い豪華な服装は、ステュワート朝チャールズ二世¹¹⁾の肖像画を彷彿とさせる。

In person . . . his hair was dressed in long curls, which at a little distance looked like black candles, and gave a singularly threatening expression to his handsome countenance. His eyes were of the blue of the forget-me-not, and of a profound melancholy. . . . In dress he somewhat aped the attire associated with the name of Charles II, having heard it said in some earlier period of his career that he bore a strange resemblance to the ill-fated Stuarts. . . . (Chapter 5, p. 115)

フック船長に与えられた「黒く長い巻き毛に、忘れな草色の青い目で、ハンサム」というような詳しい容貌の描写や、「帽子をもっとも粋な角度にしてかぶる」——‘Donning his hat at its most rakish angle’ (Chapter 13, p. 182) —— というような着こなしの描写などは、ダーリング氏に関しては、「髪が薄いのを別にすれば少年として通用する」——‘he might have passed for a boy again if he had been able to take his baldness off’ (Chapter 16, p. 208) —— 以外にはなされてはいないが、この二人がともに服装に拘泥する人物であることはわかる¹²⁾。フック船長は、死を目前にしても自分の身なりが整っていることに満足する場面——‘And his shoes were right, and his waistcoat was right, and his tie was right, and his socks were right.’ (Chapter 15, p. 204) —— さえある。

ダーリング家のパーティ前の場面では、乳母犬ナナがついに子ども部屋から裏庭へと追放されるのだが、それは妻や子どもたちが自分よりもナナを大切にするように感じられ、ついに激怒したダーリング氏の行動だった。

And still Wendy hugged Nana. ‘That’s right,’ he shouted. ‘Coddle her! Nobody cuddles me. Oh dear no! I am only the breadwinner, why should I be cuddled, why, why, why! . . . But I refuse to allow that dog to lord it in my nursery for an hour longer.’

The children wept, and Nana ran to him beseechingly, but he waved her back. He felt he was a strong man again. ‘In vain, in vain,’ he cried; ‘the proper place for you is the yard, and there you go to be tied up this instant.’ (Chapter 2, p. 85)

一家の主が動物である飼い犬に脅威を感じるように、海賊船船長フックも脅威の対象は動物だ。フック船長が甲板長スミー (Smee) に自分の右腕を奪ったピーター・パンへの憎しみを語る場面で、自分がなぜワニをこれほど怖がっているかを告白する。

‘Peter flung my arm,’ he said, wincing, ‘to a crocodile that happened to be passing by.’

‘I have often,’ said Smee, ‘noticed your strange dread of crocodiles.’

‘Not of crocodiles,’ Hook corrected him, ‘but of that one crocodile. . . . It liked my arm so much, Smee, that it has followed me ever since, from sea to sea and from land to land,

licking its lips for the rest of me . . . that crocodile would have had me before this, but by a lucky chance it swallowed a clock which goes tick tick inside it, and so before it can reach me I hear the tick and bolt.’ . . .

‘Some day,’ said Smee, ‘the clock will run down, and then he’ll get you.’

Hook wetted his dry lips. ‘Aye,’ he said, ‘that’s the fear that haunts me.’ (Chapter 5, pp. 119-20)

ピーターがフック船長の片腕をワニに食わせ、その味をしめたワニがフック船長を追いかけている。時計も腹に入っているワニからはチクタクという音が聞こえ、それが警告となって今までは逃げおおせているが、時計のねじが切れ、その音が止んだ時が怖い、とフック船長は語る。

ダーリング氏が乳母犬ナナを裏庭に追放したことが、子どもたちがピーター・パンにさらわれてしまうきっかけの一つであり¹³⁾、またフック船長の最後はワニに食われてしまうことなので、二人の悲劇の要因も動物であると言えよう。そのナナとワニの二役は、ダーリング氏とフック船長同様、同時に登場することはないので、舞台では一人の役者が演じることが多いようだ¹⁴⁾。二組の一人二役がそれぞれ絡み合っていて興味深い。

また、乳母犬ナナをかばう妻と子どもたちの中で、「誰も自分のことを大切にしない」と立腹し、その腹いせにナナを裏庭に繋いだダーリング氏は、勝ち誇るどころか、さらなる孤独感に打ちのめされる。

He was ashamed of himself, and yet he did it. It was all owing to his too affectionate nature, which craved for admiration. When he had tied her up in the backyard, the wretched father

went and sat in the passage, with his knuckles to his eyes.

(Chapter 2, p. 86)

このイメージは、海賊船の上で子分たちに囲まれながらも孤独を感じるフック船長の中に繰り返されている。ウェンディ、ジョン、マイケルと迷子の男の子たち (Lost Boys)¹⁵⁾ をすべて捕らえ、ピーター・パンの毒殺にも成功したと信じているフック船長だが、歓喜とはほど遠い気分を味わっている場面だ。

Hook trod the deck in thought. O man unfathomable. It was his hour of triumph. . . .

But there was no elation in his gait, which kept pace with the action of his sombre mind. Hook was profoundly dejected.

He was often thus when communing with himself on board ship in the quietude of the night. It was because he was so terribly alone. This inscrutable man never felt more alone than when surrounded by his dogs [crew]. They were socially so inferior to him. (Chapter 14, pp. 187-88)

思い通りの行動をした後に、家族あるいは海賊仲間に囲まれて孤独を感じているところが二人に共通している。

そもそもパーティに出掛ける前のダーリング氏が、乳母犬ナナを子ども部屋から追放するきっかけとなったのは、薬をめぐる子どもたちとのめめ事だった。その状況にも気味の悪いほどにフック船長と重なる部分がある。寝る前の水薬を飲みたくない末っ子マイケルに、自分が子ども時には両親に感謝しながら不平を言わずに薬を飲んだものだというダーリング氏。今でもマイケルの薬よりずっと苦い薬を男らしく喜んで

飲む、と断言したにもかかわらず、ウェンディが父の薬を捜して持って来ると、マイケルと同時に飲むふりをしながら、自分の薬を背中のおりに隠してしまう。

その卑劣さが子どもたち三人の不興を買い、その場の雰囲気をなんとか取り繕うためにダーリング氏を選んだのは、こともあろうにミルクと偽って自分の苦い薬をナナに飲ませて、子どもたちを笑わせようとしたことだった。

‘I have just thought of a splendid joke. I shall pour my medicine into Nana’s bowl, and she will drink it, thinking it is milk!’

It was the colour of milk; but the children did not have their father’s sense of humour, and they looked at him reproachfully as he poured the medicine into Nana’s bowl. ‘What fun,’ he said doubtfully. . . .

‘Nana, good dog,’ he said, patting her, ‘I have put a little milk into your bowl, Nana.’

Nana wagged her tail, ran to the medicine, and began lapping it. Then she gave Mr Darling such a look, not an angry look: she showed him the great red tear that makes us so sorry for noble dogs, and crept into her kennel.

(Chapter 2, pp. 84-85)

ナナにつけられた「気高い」(noble)という形容詞が、ダーリング氏の卑劣さをさらに浮き上がらせてもいる。

フック船長がピーター・パンを亡き者にするために選んだ手段は、正々堂々の剣の闘いではなく、毒薬を盛ることだった。家が恋しくなったウェンディ、ジョン、マイケルと迷子の男の子たちが、ピーターだけを残し

てネバーランドを去ろうとする時、海賊たちは子どもたちをさらってゆく。フック船長は一人でピーターの地下の家に忍び込む。入り口が子どもの体に合わせて作られていて中に入れず、眠っているピーターには手が届かないフックだが、ウェンディがピーターのために用意した薬のコップに手を伸ばし、そこに毒薬を五滴たらす。

The red in his eye had caught sight of Peter's medicine cup standing on a ledge within easy reach. He fathomed what it was straightway, and immediately he knew that the sleeper was in his power.

Lest he should be taken alive, Hook always carried about his person a dreadful drug, blended by himself of all the death-dealing rings that had come into his possession. These he had boiled down into a yellow liquid quite unknown to science, which was probably the most virulent poison in existence.

Five drops of this he now added to Peter's cup.

(Chapter 13, p. 182)

万が一捕らえられた時の自殺用に、指輪の中に入れてフック船長がいつも持ち歩いている強力な毒薬だった。眠りから目覚めたピーター・パンが薬を飲もうとすると、妖精ティンカー・ベルが身代わりに毒薬を飲み、ピーターは危うく難を逃れる。これに続くのが瀕死のティンカー・ベルを救うために、舞台上のピーターが観客に妖精を信じるかどうか尋ねる有名な場面だ¹⁶⁾。無邪気な動物あるいは子どもにこっそりと「毒を盛る」という行為が、ダーリング氏とフック船長の間で不気味に共鳴する。そしてそこには卑劣さが混在する。

ダーリング氏が正々堂々と闘わないことは、物語冒頭に紹介される求

婚のエピソードにも、もちろん軽妙なタッチではあるが、ほのめかされる。

The way Mr Darling won her [Mrs Darling] was this: the many gentlemen who had been boys when she was a girl discovered simultaneously that they loved her, and they all ran to her house to propose to her except Mr Darling, who took a cab and nipped in first, and so he got her. (Chapter 1, p. 69)

多くの男性が将来のダーリング夫人に同時に恋をし、プロポーズしようと彼女の家に走った時、ダーリング氏だけは馬車を使って真っ先に到着し、彼女を手に入れたのだった。これだけならそう悪い印象は与えないだろうが、小さなマイケルをだまして薬を飲ませようとしたことや、乳母犬ナナの皿に自分の薬を入れてミルクだと偽って飲ませようとしたエピソードが積み重ねられ、ダーリング氏は卑劣な手を使うという印象がだんだん強まってゆく。

フック船長の卑劣さは、人魚の環礁 (Mermaids' Lagoon) でのピーター・パンとの闘いの中で、ピーターのフェア・プレイの横に並べられて際立つ。

Quick as thought he [Peter] snatched a knife from Hook's belt and was about to drive it home, when he saw that he was higher up the rock than his foe. It would not have been fighting fair. He gave the pirate a hand to help him up.

It was then that Hook bit him.

Not the pain of this but its unfairness was what dazed Peter. It made him quite helpless. . . .

... Twice the iron hand clawed him. (Chapter 8, p. 150)

置き去りの岩 (Marooners' Rock) の上で闘っている時に、ピーターはフック船長のベルトからナイフを奪って優位に立ったにもかかわらず、自分がフックよりも高い位置にいると気づいたピーターがフックに手を差し伸べた。その時にフックは右手の代わりに持っている鉄の鉤——‘instead of a right hand he had the iron hook’ (Chapter 5, p. 114)——でピーターを二度、三度と刺すのだ。

またフック船長の卑劣さは、インディアンたちを急襲する場面でも描かれる。酋長の娘タイガー・リリー (Tiger Lily) の命を救われて以来、ピーターとその仲間たちを守るようになっていたインディアンたちは、高潔な野人 (noble savage) であり、夜中にフック一味が海賊船から島に上陸したことは知っていても、闘いを始めるのは夜明け前という掟を守ってじっと待っていた。

The pirate attack had been a complete surprise: a sure proof that the unscrupulous Hook had conducted it improperly, for to surprise redskins fairly is beyond the wit of the white man. . . .

Here dreaming, though wide awake, of the exquisite tortures to which they were to put him [Hook] at break of day, those confiding savages were found by the treacherous Hook.

(Chapter 12, pp. 173-74)

夜のうちに急襲を受け、タイガー・リリーと数名の勇者以外、インディアンたちは惨殺される。ナナとインディアンが ‘noble’ という形容詞を共有していることも偶然ではないだろう。

闘いの音を地下の家で聞いていたピーターと子どもたちには、どちら

が勝ったのかがわからない。ここでもフック船長の狡猾さが発揮される。「トムトム（太鼓）を鳴らすのがインディアンの勝利のしるしだから、それが鳴ればインディアンの勝利だ」というピーターの声を地上から聞き、フックは甲板長スミーにインディアンの太鼓をたたくよう指示する。

Which side had won?

The pirates, listening avidly at the mouths of the trees, heard the question put by every boy, and alas, they also heard Peter's answer.

'If the red skins have won,' he said, 'they will beat the tom-tom; it is always their sign of victory.'

... To his [Smee's] amazement Hook signed to him to beat the tom-tom; and slowly there came to Smee an understanding of the dreadful wickedness of the order. (Chapter 12, p. 177)

味方のインディアンの勝利を信じた子どもたちは地上に現れ、海賊たちにまんまと連れ去られてしまう。

手の代わりに鉄の鉤のついた右腕はフック船長の象徴でもあるだろうが、戯曲のト書きの中にはダーリング氏にも似通ったイメージを与えている部分がある。ダーリング氏が乳母犬ナナを子ども部屋から追放する時のことだ。

MR DARLING ... She [Nana] will come to her kind master, won't she? won't she? (*She advances, retreats, waggles her head, her tail, and eventually goes to him. He seizes her collar in an iron grip and amid the cries of his progeny drags her from the room. They listen, for her remon-*

strances are not inaudible)

(Act 1, Scene 1, ll. 294-98, emphasis added)

抵抗するナナの首輪をしっかりと握っている様が ‘in an iron grip’ と表現されている。もちろんこれは「力強く握る」という一般的な比喻表現ではあるが、私たち読者にとって、ここにフック船長の鉄の鉤との繋がりを見出すのは、そう難しいことではないだろう。しかもこの場面はダーリング氏が子どもたちに最も憎まれる場面なのだ。

子どもたちに好かれないのに嫌われてしまうのも、ダーリング氏とフック船長に共通したジレンマだ。父親であるダーリング氏が子どもたちに好かれない気持ちは当然だが、子どもたちを捕らえた後、海賊船の上で独り言を言うフック船長の言葉は意外に聞こえる。

HOOK No little children love me. I am told they play at Peter Pan, and that the strongest always chooses to be Peter. They would rather be a Twin than Hook; they force the baby to be Hook. The baby! that is where canker gnaws. (*He contemplates his industrious boatswain [Smee]*) 'Tis said they find Smee lovable. But an hour ago I found him letting the youngest of them try on his spectacles. Pathetic Smee . . . a happy smile upon his face because he thinks they fear him! (Act 5, Scene 1, ll. 46-54)

小さな子どもたちは誰も自分のことを愛してくれない、ままごと遊びをする時も、強い子どもがピーターの役をやり、フックをやるくらいなら双子の役¹⁷⁾をした方がいいと思ひ、フックの役は赤ん坊にさせている、とフックは嘆く。しかし自らを恐ろしい海賊と思ひこんでいる甲板長ス

ミーは、子どもには「愛すべき」人物と思われていて、なんて哀れな奴なのだろうとも思う。しかしこの場面は、本当に哀れなのは子どもに愛されていないフック船長だということが観客には伝わり、シェイクスピア的な劇的アイロニーになっている。

この場面の直後にフック船長は、男の子たち八人を甲板に並べ、このうち六人は板歩きの刑 (walking the plank)¹⁸⁾ に処せられるが、二人だけは船員付きの給仕 (cabin-boy) として仲間に入れてやろうと誘いかける。これが先ほどの独白に続く場面であることから、このフック船長の申し出は、まるで子どもに好かれたいための甘言であるかに聞こえる。しかし子どもたちは自分たちの母親はそんなことは望まないと言い、その誘惑には負けない。そして今まで母の役割を果たしてきたウェンディが最後の言葉をかける。

WENDY These are my last words. Dear boys, I feel that I
have a message to you from your real mothers, and it is this,
'We hope our sons will die like English gentlemen.'

(The boys go on fire)

TOOTLES I am going to do what my mother hopes. What are
you to do, Twin?

FIRST TWIN What my mother hopes. John, what are —

HOOK Tie her up! Get the plank ready.

(Act 5, Scene 1, ll. 93-99)

「英国紳士らしく死になさい」という言葉に子どもたちは奮い立ち、勇敢に死に向き合おうとするが、そのことがフックを怒らせる。二人だけでも子どもを手下にしようとしたフックの企みもうまくゆかず、しかも英国一のパブリック・スクール出身で、出立ちは英国王チャールズ二世の

面影を背負っているのに、海賊である自分の生き方は「英国紳士」らしくないとネバーランドでの母の象徴であるウェンディに否定されてもいるからだ。

フックにとっても母の存在が大切だとわかる言葉は、物語の至る所に組み込まれている。

‘... cook a large rich cake of a jolly thickness with green sugar on it. . . . The silly moles had not the sense to see that they did not need a door apiece. That shows they have no mother. . . . They will find the cake and they will gobble it up, because, having no mother, they don’t know how dangerous ’tis to eat rich damp cake.’ (Chapter 5, pp. 120-21, emphasis added)

地下の家にいる子どもたちが、一人に一つのドアを持つ必要がないことを知らないのも、こっそりしたケーキを食べてしまうのも、母がいないからだ。フックは甲板長スミーに語る。また、子どもたちに「母（ウェンディ）」ができてしまったことに愕然とするフックの様子も描かれている。

... he [Hook] sat with his head on his hook in a position of profound melancholy.

‘Captain, is all well?’ they asked timidly, but he answered with a hollow moan.

‘He sighs,’ said Smee.

‘He sighs again,’ said Starkey.

‘And yet a third time he sighs,’ said Smee.

‘What’s up, captain?’

‘The game’s up,’ he cried, ‘those boys have found a mother.’...

‘Captain,’ said Smee, ‘could we not kidnap these boys’ mother and make her our mother?’

‘It is a princely scheme,’ cried Hook, and at once it took practical shape in his great brain. ‘We will seize the children and carry them to the boat: the boys we will make walk the plank, and Wendy shall be our mother.’

(Chapter 8, pp. 145-46, emphasis added)

甲板長スミーがウェンディを誘拐して自分たちの母にすることを提案すると¹⁹⁾、フックもすぐに同意する。フックの目的がピーター・パンへの復讐だけなら、ウェンディを母にする必要などない。

男の子たちが母の望む通りに死のうと覚悟を決める時、あるいはそれ以前にも、母が恋しくて現実の家に帰りたと思う時、そこに父の存在は希薄だ。そして母の存在に負けてしまうのは、フック船長だけではない²⁰⁾。ネバーランドからウェンディ、ジョン、マイケルと一緒にダーリング家に来た迷子の男の子たち六人は、ダーリング家の養子になれるか否かの運命が下されるのを、ダーリング夫人の前で待つ。一緒にいるはずのダーリング氏の存在は忘れられてしまっている。

They stood in a row in front of Mrs Darling, with their hats off, and wishing they were not wearing their pirate clothes. They said nothing, but their eyes asked her to have them. They ought to have looked at Mr Darling also, but they forgot about him.

Of course Mrs Darling said at once that she would have them; but Mr Darling was curiously depressed, and they saw that

he considered six a rather large number. . . .

‘George!’ Mrs Darling exclaimed, pained to see her dear one showing himself in such an unfavourable light.

Then he burst into tears, and the truth came out. He was as glad to have them as she was, he said, but he thought they should have asked his consent as well as hers, instead of treating him as a cipher in his own house. (Chapter 17, p. 215)

ダーリング氏が迷子の男の子たちを養子として受け入れることをすぐに快諾しなかったのは、それに反対したからではない。自分のことなど取るに足りない存在だとでもいうように、男の子たちがダーリング夫人にだけ許可を求めている様子を嫉妬したからだった。

母親と父親の子どもを思う気持ちの違いは、窓に関するエピソードで描かれている。ピーター・パンは赤ん坊の時に、大人になりたくないからと家出をし、ケンジントン公園で妖精と暮らしていた²¹⁾。ネバーランドにいるウェンディが「子ども部屋の窓は今も開いていて、いつでも帰ることができる」と子どもたちに語っている時に、ピーターはなぜ自分がネバーランドで暮らすようになったかという理由を告白する。

‘Wendy, you are wrong about mothers. . . . Long ago,’ he said, ‘I thought like you that my mother would always keep the window open for me; so I stayed away for moons and moons and moons, and then flew back; but the window was barred, for mother had forgotten all about me, and there was another little boy sleeping in my bed.’ (Chapter 11, p. 167)

ピーターが家出から戻ってみると、窓は閉ざされ、彼のベッドには別の

赤ん坊が眠っていたというのだ。子どもたちはこの話を聞いて一刻も早く家に帰らなければと思う。そしてこのエピソードに対応する場面がダーリング家でも繰り広げられていた。ピアノを弾いてほしいと夫人に頼んだダーリング氏が、隙間風が寒いから窓を閉めるように言う。

‘Won’t you play me to sleep,’ he asked, ‘on the nursery piano?’ and as she was crossing to the day-nursery he added thoughtlessly, ‘And shut that window. I feel a draught.’

‘O George, never ask me to do that. The window must always be left open for them, always, always.’

(Chapter 16, p. 211)

ダーリング氏の思慮に欠けたこの発言があるからこそ、子どもたちの帰還の場面でダーリング氏の存在が忘れられるのは、当然の報いと読者には感じられる。

忘れられる運命にあるのは、フック船長も同じだ。ピーター・パンは初めから忘れっぽい性格という設定になってはいるが、子どもたちと分かれて一年後に再びダーリング家にやって来たピーターの言葉は、フックへの同情を誘いさえする。

She [Wendy] had looked forward to thrilling talks with him [Peter] about old times, but new adventures had crowded the old ones from his mind.

‘Who is Captain Hook?’ he asked with interest when she spoke of the arch enemy.

‘Don’t you remember,’ she asked, amazed, ‘how you killed him and saved all our lives?’

‘I forget them after I kill them,’ he replied carelessly.

(Chapter 17, p. 219)

宿敵フックを殺したことも忘れてしまっているピーターにウェンディは驚くが、ピーターの言葉 ‘I forget them after I kill them’ によって、フックは忘れられた存在であるだけでなく、大勢の中の一人でしかない存在として卑小化されている。

存在が卑小化されるイメージは他にもあり、そこにもダーリング氏とフック船長の共通点を見いだすことができる。三人の子どもたちがさらわれた後、ダーリング氏が後悔の念から子ども部屋にあるナナの犬小屋で暮らすようになったのも、フック船長が海賊船からワニの腹の中へと落ちていったことと平行になっているのではないか。この世から姿を隠すあるいは姿を消すのが、犬小屋の中あるいはワニの腹の中というまたもや動物に関するイメージであるのがおもしろい。

子どもたちを救うため、そしてフック船長との決着をつけるため、ピーター・パンが海賊船に忍び込んだ。姿の見えない何者かによって次々と海賊たちが殺されてゆく様を目の当たりにして、フックは「ヨナが乗船している」—— ‘There’s a Jonah aboard.’ (Chapter 15, p. 200) —— という不吉な台詞を口にする。ヘブライの預言者ヨナは神の命に逆らって船で逃亡するが、海上で遭遇した嵐の責任をとって生け贄として海に投げ込まれ、巨大な魚に飲み込まれる²²⁾。この旧約聖書の物語から、ヨナとは船に禍をもたらす者という意味で使われるようになったのだが、ピーターとの闘いの最後でフックが海の中で待つワニに飲み込まれることを考えると、ヨナ的な存在は実はフック自身であり、あの台詞はまるで自分の運命を決定づける予言であるかのようだ²³⁾。

そしてそのような運命をフック自身が選択した理由も、ダーリング氏の世間の目を気にする性質に繋げて考えることができるだろう。ダーリ

ング家はロンドンの高級住宅街ブルームズベリーにあるやや陰気な通りの14番地——‘The night nursery of the Darling family . . . is at the top of a rather depressed street in Bloomsbury.’ (Act 1, Scene 1, ll. 1-2, stage direction); ‘Of course they lived at 14.’ (Chapter 1, p. 69)——に設定されている。ダーリング氏は近所の人々と全く同じようでありたいという強い望みから、子どもたちの世話を乳母にまかせている。しかしダーリング家はそう裕福な家庭ではないために人間の乳母を雇う余裕がなく、ケンジントン公園で出会ったニューファンドランド犬ナナを乳母にしたのだった。

Mrs Darling loved to have everything just so, and Mr Darling had a passion for being exactly like his neighbours; so of course, they had a nurse. As they were poor, owing to the amount of milk the children drank, this nurse was a prim Newfoundland dog, called Nana. . . . She proved to be quite a treasure of a nurse. . . .

No nursery could possibly have been conducted more correctly, and Mr Darling knew it, yet he sometimes wondered uneasily whether the neighbours talked.

He had his position in the City to consider.

(Chapter 1, pp. 71-72)

ダーリング夫人はナナを「宝物」のような乳母だと褒め、それはダーリング氏も認めるところだが、彼には近所の人々から噂されているのではないかという心配がある。何と言っても彼はロンドンの金融街シティでの地位を守らなければならないのだ。

家計を切り詰めるダーリング家には、使用人はライザという女性一人

しか雇われていないのだが、ライザを指す時に二人はいつの間にか「使用人たち」と複数形を使うようになっていた。それがダーリング氏の怒声を押さえようとする夫人の言葉から見えてくる。

‘George,’ Mrs Darling entreated him, ‘Not so loud; the servants will hear you.’ Somehow they had got into the way of calling Liza the servants. (Chapter 2, p. 85)

自分の振舞いの評価を命と引換えにしたのがフック船長だ。フックの死は、ピーター・パンとの最後の闘いに敗れた結果ではなく、彼がその闘いの中で、パブリック・スクールでたたき込まれた品行方正さ (good form) とは何かを悶々と悩み続け、辿り着いた結論だった。

But above all he retained the passion for good form.

Good form! However much he may have degenerated, he still knew that this is all that really matters.

From far within him he heard a creaking as of rusty portals, and through them came a stern tap-tap-tap, like hammering in the night when one cannot sleep. ‘Have you been good form today?’ was their eternal question. . . .

Most disquieting reflection of all, was it not bad form to think about good form?

His vitals were tortured by this problem. It was a claw within him sharper than the iron one. . . .

(Chapter 14, pp. 188-89)

子どもたちを海賊船に捕らえ、ピーター・パンも毒殺したと信じている

フックが、なぜか勝利に酔わずに、自分の品行について思い悩む。夜ごとに心の奥底から「今日の行いは良かったか」という声が聞こえてくる。そしてフックの心を最も乱すのは、「良い行いについて考えるのは悪い行いなのではないか」という疑問だ。それは自分の鉄の鉤よりも鋭く彼の心を引き裂いている。

死んだはずのピーター・パンが海賊船に忍び込み、ついに最後の決闘の時が来た。互角の剣の闘いが続いた後、右の鉤で最後のとどめを刺そうとしたフックは、逆に脇腹をピーターに刺され、自分の血にぞっとして剣を落としてしまう。

At the sight of his own blood . . . , the sword fell from Hook's hand, and he was at Peter's mercy.

'Now!' cried all the boys; but with a magnificent gesture Peter invited his opponent to pick up his sword. Hook did so instantly, but with a tragic feeling that Peter was showing good form . . .

Hook was fighting now without hope. That passionate breast no longer asked for life; but for one boon it craved: to see Peter bad form before it was cold for ever.

(Chapter 15, pp. 202-03)

フックが剣を落とし圧倒的優位に立ったピーターがここしたのは、フックにとどめを刺すのではなく、彼に剣を拾うよう促すというフェア・プレイだった。宿敵ピーターが品行方正さを見せたことが、フックを悲劇的な気持ちにさせている。彼が望むのはもはや自分の命ではなく、ピーターが悪い行いをするのを見ることだった。

ピーターの本性を見るために — 'Now, now, he thought, true form

will show' — フックは剣の闘いを放棄し、船を爆破させるため弾薬庫に火つける。しかしピーターは冷静に弾薬庫から砲弾を持って出てきて、それを海に放り投げた。どうしてもピーターに悪い行いをさせたいフックは最後の手段に出る。

Seeing Peter slowly advancing upon him through the air with dagger poised, he sprang upon the bulwarks to cast himself into the sea. . . .

He had one last triumph, which I think we need not grudge him. As he stood on the bulwark looking over his shoulder at Peter gliding through the air, he invited him with a gesture to use his foot. It made Peter kick instead of stab.

At last Hook had got the boon for which he craved.

'Bad form,' he cried jeeringly, and went content to the crocodile. (Chapter 15, p. 204)

ピーターが短剣を手に持ち近づいてくる中で、フック船長は舷牆（甲板周りの鉄柵）に飛び乗り、振り向いてピーターに足を使えと合図を送る。するとピーターは短剣でとどめを刺すのをやめ、フックを蹴って海に落としたのだった。背を向けた敵を蹴るのはまさしく悪い行いで、フックはそれに満足してワニの中へと落ちていった。

ダーリング氏もフック船長も、周囲からどう思われるかを非常に気にかける人物として描かれ、ことフックに関しては、品行方正さが命との引換えにまでなっている。反対にダーリング氏は、三人の子どもをさらわれて以来、犬小屋に入ったまま馬車で仕事に出掛けるなど、周囲から奇異に思われる行動をとるようになったわけだが、二人ともアンチクライマクティックに姿を消してゆく点では同じだと言えなくもない。剣の

闘いで、の壮絶な死を遂げるのではなく、ピーターに背中を蹴られて海に落ちてワニに食われるフック船長。迷子の男の子たちを養子に迎え入れ、居間に連れて行った後、ダーリング夫人とウェンディの登場が続くのは対照的に一度も登場しないダーリング氏。ピーターによって、そしてダーリング夫人とウェンディによって、卑小化されるのがこの哀れな男たちの運命だったようだ。

* * *

永遠の少年ピーター・パンを主人公としたファンタジー物語『ピーターとウェンディ』そして戯曲『ピーター・パン』は、実は大人の悲しさが克明に描かれるというパラドックスをはらむ。それはダーリング氏とフック船長に限ったことではなく、ダーリング夫人にも、ピーターを待つのを諦めて窓を閉ざし大人になってしまったウェンディにも言えることだ。ウェンディが大人になり、今度は娘ジェイン (Jane) がピーターと一緒にネバーランドへ行く。そして次はジェインの娘マーガレット (Margaret) が同じことを繰り返す。作家バリはこの物語を「子どもが陽気で、無邪気で、そして無情であるかぎりこの繰り返しは続く」——‘it will go on, so long as children are gay and innocent and heartless.’ (Chapter 17, p. 226)——と結んだ。ここで彼が言う子どもの無情さとは、大人になった母を置き去りにしてネバーランドへ楽しげに飛び立って行く娘の無情さでもあるし、大人になってしまったウェンディそしてジェインの目の前で平然と次の世代の娘を連れて行くピーターの無情さでもあるだろう。永遠に子どもでいられる喜びよりも、大人になってしまう悲しさこそが、この物語が残す余韻だ。

その悲しい大人たちの中でも、ここでは一つのコインの表と裏のような存在のダーリング氏とフック船長を、テキストの中でだけ取り上げて

みた。しかしこの二人の登場人物のことを考える時、作家バリとルウェリン・デイヴィス家の五人の息子たち²⁴⁾との交友という伝記的事実を照らし合わせてみるのもおもしろいだろう。ルウェリン・デイヴィス家の人々とバリが出逢ったケンジントン公園は、ピーター・パンが妖精たちと一緒に住む場所となり、そしてピーター・パンの銅像が片隅に置かれる場所となった²⁵⁾。ルウェリン・デイヴィス家の五人の息子たちと海賊ごっこを繰り広げたバリ。ルウェリン・デイヴィス氏とシルヴィア夫人がまだ幼い息子たちを残して癌で亡くなるずっと前から、第二の父親的な存在であり続けたバリ。そこからは、ダーリング氏とフック船長の二人の登場人物に自分の願望を投影していった作家の姿が見えてくる。そうすれば、この二役を一人の役者が演じる伝統が出来上がったのも、自然の成り行きというより必然だったように感じられる。

『ピーターとウェンディ』が世に出てからちょうど100年が経つ今年には、J・M・バリの新しい伝記や作品論の出版が多く予定されている。ロジャー・ランスリン・グリーン (Roger Lancelyn Green) が50年ほど前に上梓した *Fifty Years of 'Peter Pan'* に倣って、今度は *A Hundred Years of 'Peter Pan'* というタイトルの本が出版されることも期待したい。

注

- 1) Humphrey Carpenter, *Secret Gardens: The Golden Age of Children's Literature*, p. 170 など参照。
- 2) J・M・バリと深い親交のあったシルヴィア・ルウェリン・デイヴィス (Sylvia Llewelyn Davies) の弟であり、作家アンジェラ・デュ・モーリエ (Angela du Maurier) とダフネ・デュ・モーリエ (Daphne du Maurier) の父親。シルヴィア・ルウェリン・デイヴィスについては注 24 を参照。
- 3) J. M. Barrie, *Peter and Wendy*, Chapter 2, p. 79. これ以降この本から

の引用は章とページを本文中で示す。

- 4) 正式にはジェイムズ・フック船長 (Captain James Hook、Jas は James の略称)。フック自身はジャスという略称を好んで使う。
- 5) J. M. Barrie, *Peter Pan or The Boy Who Would Not Grow Up*, Act 5, Scene 1, l. 208. これ以降この本からの引用は幕、場、行を本文中で示す。
- 6) J・M・バリは1925年に‘Jas Hook at Eton, or The Solitary’ という短編も書いている。Jacqueline Rose, *The Case of Peter Pan or The Impossibility of Children’s Fiction*, p. 115 参照。
- 7) cf. LAERTES The canker galls the infants of the spring
Too oft before their buttons be disclos’d,
And in the morn and liquid dew of youth
Contagious blastments are most imminent.

(*Hamlet*, Act 1, Scene 3, ll. 39-42)
- 8) cf. MACBETH To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
Creeps in this petty pace from day to day,
To the last syllable of recorded time;
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle!
Life’s but a walking shadow; a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.

(*Macbeth*, Act 5, Scene 5, ll. 19-28)
- 9) ダーリング氏とフック船長の言葉遣いについて、R. D. S. Jack, *The Road to the Never Land*, p. 169～では、初期の台本からの変遷が紹介されている。
- 10) ダーリング家では、人間の乳母の代わりに有能なニューファンランド

犬ナナが三人の子どもたちの世話をしている。

- 11) 1630-85年生没、在位1660-85年。王政復古時代の王。清教徒革命によって禁止された演劇を復活させ、自分自身も女優ネル・グウィン (Nell Gwyn, 1650-87) を愛人にするなど、「陽気な君主 'Merry Monarch」の愛称で知られた。シェイクスピアの時代の後、閉鎖されていた劇場を再開し、演劇黄金時代の再来を可能にした王の面影を、劇作家バリがフック船長に宿したと言うのは考え過ぎであろうか。
- 12) 『ピーター・パン』の続編ジェラルディン・マコックラン (Geraldine McCaughrean) 作『ピーター・パン・イン・スカーレット』 (*Peter Pan in Scarlet*, 2006) の重要なテーマは服装であり、ピーターが死んだフック船長の残した緋色の上着を身につけることで、まるでフック船長の精神が乗り移ったかのように振る舞う様子が描かれている。
- 13) この出来事を後悔するダーリング氏は、子どもたちがいなくなってからナナの犬小屋に入って暮らすようになる。
- 14) チェイター＝ロビンソンの『ピーター・パン～プリティッシュ・ミュージカル』 (1985) でも、ジョーンズの『ピーター・パン～ミュージカル・ファンタジー』 (1994) でも、キャストのページにはナナとワニを同一人物が演じることが勧められている。
- 15) ネバーランドでピーター・パンと以前から一緒に暮らしている迷子の男の子たちは、トゥートウルズ (Tootles)、ニブズ (Nibs)、スライトリエ (Slightly)、カーリー (Curly)、双子たち (The Twins) の六人。
- 16) PETER ... Her light is growing faint, and if it goes out, that means she is dead! Her voice is so low I can scarcely tell what she is saying. She says—she says she thinks she could get well again if children believed in fairies! ... Do you believe in fairies? Say quick that you believe! If you believe, clap your hands! ... Oh, thank you, thank you, thank you! (Act 4, Scene 1, ll. 275-283)

この場面は、ピーター・パンとウェンディが出会う場面でピーターが妖

精の誕生と死について語る内容の裏返しである。

PETER You see, Wendy, when the first baby laughed for the first time, the laugh broke into a thousand pieces and they all went skipping about, and that was the beginning of fairies. And now when every new baby is born its first laugh becomes a fairy. So there ought to be one fairy for every boy or girl.

WENDY (*breathlessly*) Ought to be? Isn't there?

PETER Oh no. Children know such a lot now. Soon they don't believe in fairies, and every time a child says 'I don't believe in fairies' there is a fairy somewhere that falls down dead.

(Act 1, Scene 1, ll. 403-412)

妖精の誕生と死のエピソードは、P・J・ホーガン監督の映画『ピーター・パン』で実に巧みに描かれ、またバリが『ピーター・パン』を創作した経緯を描いたマーク・フォスター (Marc Forster) 監督の映画『ネバーランド』(*Finding Neverland*, 2004)でも、死の床にあるシルヴィア・ルウェリン・デイヴィスを描く場面に投影されている。

- 17) 双子は子どもたちの中で最も出番も台詞も少なく、First Twin と Second Twin と呼ばれ、名前さえつけられていない。
- 18) 目隠しをさせられ、船舷から突き出した板の上を歩かされ海に落ちる刑で、海賊が捕虜を処刑する方法。
- 19) 子どもたちを海賊船に誘拐した後の場面で、ウェンディを縄で縛ることを命じられたスミーは、「助けてやったら自分の母になってくれるか」とウェンディに囁きさえる。

It was Smee who tied her to the mast. 'See here, honey,' he whispered, 'I'll save you if you promise to be my mother.'

(Chapter 14, p. 193)

- 20) マコックランの『ピーター・パン・イン・スカーレット』でも、パブリック・スクール時代のフック船長が、母親のせいでイートン校を辞めざるを得なかったという設定になっている。(Peter Pan in Scarlet, Chapter 18 'Taking Deadness,' p. 187)
- 21) *Peter Pan in Kensington Gardens* (1906) 参照。
- 22) 旧約聖書、ヨナ書、第1章～第2章。
- 23) マコックランの『ピーター・パン・イン・スカーレット』では、ワニに飲み込まれたフック船長は実は死んでおらず、消化液で溶けた体を長い衣で覆い、正体を隠してピーターへの復讐を企てようとしている。ヨナも後に巨大な魚に吐き出され、命が助かる。マコックランはこの旧約聖書の物語をプロットに取り込んでいると思われる。
- 24) アーサー (Arthur, 1863-1907) とシルヴィア (Sylvia, 1866-1910) のルウェリン・デイヴィス (Llewelyn Davies) 夫妻の息子たちで、ジョージ (George, 1893-1915)、ジョン (John or 'Jack', 1894-1959)、ピーター (Peter, 1897-1960)、マイケル (Michael, 1900-1921)、ニコラス (Nicholas or 'Nico', 1903-1980) の五人。ピーター・パンの物語や戯曲は、作家バリとこの五人の少年たちとの遊びの中から生まれ、戯曲『ピーター・パン』は彼らに献呈されている ('To the Five: A Dedication,' pp. 75-86)。ピーター・パンの物語と戯曲に登場するジョージ・ダーリング氏、息子たちジョンとマイケル、そしてピーター・パンはすべてこの兄弟から名をもらっている。物語の中でジョンが「血染めの手のジャックと名乗りたいと思ったことがある」—— 'I once thought of calling myself Red-handed Jack.' (Chapter 14, p. 191) —— と言っているのも、ルウェリン・デイヴィス家のジョンの愛称がジャックだったことを反映しているだろう。そしてフック船長の正式な名ジェイムズは、もちろんバリ自身の名だ。Andrew Birkin, *J. M. Barrie and the Lost Boys: The Real Story Behind Peter Pan*; Humphrey Carpenter, *Secret Gardens: The Golden Age of Children's Literature* など参照。
- 25) ピーター・パンの銅像は、秘密のうちに一夜にして1912年5月1日にケ

ンジントン公園のサーペントイン池のほとりに姿を現した。バリは銅像を披露する記事をその朝の新聞に載せた。

There is a surprise in store for the children who go to Kensington Gardens to feed the ducks in the Serpentine this morning. Down by the little bay on the south-western side of the tail of the Serpentine they will find a May-day gift by Mr J. M. Barrie, a figure of Peter Pan blowing his pipe on the stump of a tree, with fairies and mice and squirrels all around. It is the work of Sir George Frampton, and the bronze figure of the boy who would never grow up is delightfully conceived.

(*The Times*, 1 May 1912)



参考文献

- Barrie, J. M. *Peter and Wendy*. In *Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy*. 1911; Oxford: Oxford World's Classics, 1999.
- . *Peter Pan in Kensington Gardens*. In *Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy*. 1906; Oxford: Oxford World's Classics, 1999.
- . *Peter Pan or The Boy Who Would Not Grow Up*. In *Peter Pan and*

- Other Plays*. 1903; 1928; Oxford: Oxford World's Classics, 1999.
- . *When Wendy Grew Up: An Afterthought*. In *Peter Pan and Other Plays*. 1907; 1928; Oxford: Oxford World's Classics, 1999.
- Birkin, Andrew. *J. M. Barrie and the Lost Boys: The Real Story Behind Peter Pan*. 1979; New Haven: Yale UP, 2003.
- Caird, John & Trevor Nunn. *Peter Pan or The Boy Who Would Not Grow Up: A Fantasy in Five Acts*. 1993; London: Methuen Drama, 1998.
- Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens: The Golden Age of Children's Literature*. London: Allen & Unwin, 1985.
- Chater-Robinson, Piers. *Peter Pan: The British Musical*. 1985; London: Samuel French, 1995.
- Green, Roger Lancelyn. *Fifty Years of 'Peter Pan'*. London: Peter Davies, 1954.
- Internet Broadway Database*. 'Peter Pan: The Boy Who Wouldn't Grow Up.' <http://www.ibdb.com/show.php?id=9959>.
- Jack, R. D. S. *The Road to the Never Land: A Reassessment of J M Barrie's Dramatic Art*. 1991; Glasgow: Humming Earth, 2010.
- Jones, Glyn. *Peter Pan: A Musical Fantasy*. 1994; Chania (Greece): DCG Publications, 2010.
- McCaughrean, Geraldine. *Peter Pan in Scarlet*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Rose, Jacqueline. *The Case of Peter Pan or The Impossibility of Children's Fiction*. 1984; U of Pennsylvania P, 1993.
- Shakespeare, William. *The Arden Shakespeare Complete Works*. Eds. Richard Proudfoot, Ann Thompson, and David Scott Kastan. London: Arden Shakespeare, 2001.
- The Times*. 1 May 1912. London. Quoted in *The Royal Parks*. 'Kensington Gardens: Peter Pan Statue—A Piece of Neverland.' http://www.royalparks.org.uk/parks/kensington_gardens/peter_pan_statue.cfm.